

# エンタメ

仙頭 武則

## ■映画を高音質で上映

二〇二二年を振り返る時、私はウイルスよりも映画「アメリカン・ユートピア」を真っ先に思い出すだろう。

公開から六カ月後の十一月末「爆音映画祭イン松本」で念願が叶い、観賞した。われを忘れて拍子をとおり、感涙した。先端技術を駆使して極限までぞき落とした舞台装飾と振り付け、全てに圧倒された。そして、気がついた。これほどまでに感動したその音は、その場でしか体感できない音だったということ。その正体は「爆音」という音響のセッティングだった。

「爆音」は〇四年に東京・吉祥寺の「パウスシアター」で始まった、高音質で映画を上映する伝説の企画。耳が刺激されると映画を見る目が変わり、同じ作品でも違つよう

## 脳幹まで響く音を体感



昨年の「爆音映画祭イン松本」で、(左から)樋口泰人氏、筆者、映画祭主催の宮崎善文さん

に感じる。一四年にパウスシアターが閉館した後も「爆音映画祭」として各地にその名をとどろかせた。今や屈指の人気イベントになっている。

爆音映画祭の主宰は樋口泰人氏。私が最も尊敬し、信頼している映画と音楽の評論家だ。その驚異的な聴覚には称賛を超越して驚愕するばかり。私と、三月に亡くなった青山真治監督の映画作りの指針ともなっていた。映画の「音」とは「音響」。つまり「響き」の表現だ。樋口氏が私

たちに投げかけているのは、映画においてささやき声の音量は小さいのか、という問いだ。映画には「画面に映っていない音」が存在する。詳細は、樋口氏の著書映画は爆音でささやく99-09」(bo id)で知ることができる。

爆音とは機材が異なる音の表現「bo id sound 映画祭」が樋口氏自らの「耳」による調整が施され、ついに名古屋の名演小劇場で二十日から開催されることになった。耳触りの良い、通り過ぎていくだけの音ではなく、脳内の幹にまで到達して刻み込まれる音をぜひこの機会に体験してほしい。そうすれば、この先、街をただ歩いているだけで、洪水の中から清らかなせせらぎを聴きとることができるようになるだろう。

(名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー―次回掲載は六月二日)